

仕事人秘録

結局1年間、掛け持ちのアルバイトを続けた平松氏は渡航先を東南アジアに定めた。

必死で働き、380米ドル稼いだ。まだ、1ドル360円の時代である。完成して1年もたっていない東海道新幹線に乗って新大阪に着いた後は、ローカル線に乗る。ヒッチハイクを繰り返しながら鹿児島を目指した。鹿児島港からは当時、まだ返還前の沖縄の那覇や石垣島を経由して台湾の基隆行きの船が出ていた。

私が乗船することになった貨客船では、毎回の食事にカレーライスが振る舞われた。当然、1食につき1

人に恵まれた転職人生 ③

元ライブドア社長

平松 庚三氏



平松氏は米連邦議会議事堂にも足繁く通った＝ロイター

アジア放浪後、読売新聞社へ

福でないにもかかわらず、出身で読売新聞ニューヨーク支局帰りの彼は私の知的好奇心をドンドン刺激してくれた。

その後、東南アジアを約10カ月近く旅した平松氏は1966年、日本に帰国する。

視野を広げた結果、大学には到底戻る気がしなかつた。

二つ返事でOKした。こうして、私は5年間に

人あたり1杯なのだが、私は厚かましくも2食分もらっていた。だが、よく見ると同じように2食分もらっている男がいる。偶然、彼と目が合ったのをきっかけに親しくなったのが英国人のマイク・ハートだ。彼は妙にウマが合って、その後数カ月間一緒に旅をすることになった。

旅の道中では多くの人のニラ市役所勤務で特段、裕

優しさに触れた。台湾の高雄からフィリピンのセブヘリーターを何年もやっていった。68年のある日、大学の先輩から「読売新聞の外報で夜勤の仕事があるぞ」と紹介された。嘱託ながら面白そうだったので、働くことにした。

そこで、私の人生に多大の影響を与えたのが、5歳上の高濱賛さんだ。カリフォルニア大学バークレー校

籍した早大を69年に中退し、国際ジャーナリストを目指して渡米した。助手として朝8時半から夜11時半までホワイトハウスや上下両院議会、国務省などを駆け回りつつ、昼間は大学に通うという嵐のような日々

の始まりだった。支局長として私を待ち構えていたのが、ナベツネこと渡邊恒雄氏だった。